

第三十八回

市民能樂のつどい

日時

平成二十九年十月九日（月・祝）

午前十時始め午後五時三十分頃終了予定

場所

JMSアステールプラザ中ホール・能舞台
（広島市中区加古町四番十七号）

主催

公益財団法人広島市文化財団
広島市能樂愛好者連盟

後援

広島市・広島市教育委員会・中国新聞社
NHK広島放送局・中国放送・広島テレビ
広島ホームテレビ・テレビ新広島
広島エフエム放送・FMちゅーピー 76.6MHz

協力

面匠会（能面展示）

ごあいさつ

「第三十八回市民能楽のつどい」の開催にあたり、多数の皆様にご来場いただき、誠にありがとうございます。

この市民能楽のつどいは、能楽を愛する方々に日頃の活動の成果を発表する機会を提供し、伝統芸能の良さを広く市民の皆様を知っていただくために、毎年開催している催しです。

出演は、地元広島で活動されている能楽四流派の方々に加えて、広島市能楽愛好者連盟と私共広島市文化財団が共催している「能楽ワークショップ 能楽入門講座」と「子ども能楽ふれあい教室」の受講生の皆様です。

長きに渡り研鑽された方々や新たに始められた出演者の皆様のすばらしい舞台をはじめ、面匠会の皆様による傑作能面の数々の展示、さらには今回から始まる特別企画として、地元広島に所縁の深いプロの能楽師の方々にご協力いただき、初心者から上級者まで能楽を楽しく学べる新企画、「能楽ガイド★広島」の開催など、能楽の魅力をふんだんに取り込んだ内容となっております。

能楽はユネスコの世界無形文化遺産にも登録され、国際的にも益々関心を集めております。このつどいが市民の皆様方にとりまして、わが国の伝統芸能に対する出会いの場となり、より深く理解していただく機会となることを願っております。

終わりに、広島市能楽愛好者連盟の方々をはじめ、このつどいの開催にあたりご支援・ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成二十九年十月九日

公益財団法人広島市文化財団

理事長 藤岡 賢司

番組

(喜多流 連吟) 能楽ワークショップ杜若・羽衣会

籠太鼓

木川 恵子
山田 千恵子
藤田 千恵美
田坂 弘子
中村 晴江
小野 典子

稲葉 潔
草野 耕一
吉中 信人
田坂 茂
元田 武久
田邊 雅章

(平成二十二年・二十七年受講生)

(宝生流 連吟) 能楽ワークショップ紅葉の会

鉄輪

徳原 恵美子
荒井 照江

重田 千晴
野崎 信平
森 憲治
中村 漆子
坂本 由紀子

(観世流 連吟) 能楽ワークショップ若竹の会

鉢木

寺浜 佳子
釘宮 道子

中尾 進安
高山 智行
竹内 善幸
松本 光昭

(宝生流 連吟) 能楽ワークショップ浮雲会

鳥追

森山 直美
落合 光代
近藤 剛
上野 実智子

森 憲治
野崎 信平
原 明博

(午前十時始め)

(金剛流 連吟) 能楽ワークショップ東雲会

小 督

松本 真由子
反田 豊昭
田川 清

吉田 美苗
古谷 真理

(喜多流 能学習発表) 平成二十九年子ども能楽ふれあい教室受講生

西 王 母

荒木 愛乃
猪狩 太晴
井手本 凜駈
岩樋 奈菜
宇川 小百合
大穴 瑞葉
河川 一輝
河本 理央

清藤 可蓮
河野 朱里
河野 真穂
高橋 菜子
田辺 統吾
谷 美優
辻村 陽菜
出島 渚帆

長谷川 千尋
福島 ななか
藤井 美空
山府 紗月
山本 真歩
山本 華子
山本 未怜

※謡と舞の演者を替えて二回演じます。

(宝生流 連吟) 能楽ワークショップ緑樹会

橋 弁 慶

横村 博道
萩原 巧

手塚 正子
角野 真理子
山田 節子
江原 由美子

森 憲治
野崎 信平
原 明博

(観世流 連吟) 能楽ワークショップ好謡会

蟬 丸

岡田 文子
沖本 ふみ子
前田 光子

滝口 裕子
岩見 和子
向井 節子

谷口 宏昭
土居田 幹男
中尾 弥生
新見 好枝
浜田 志穂

(十一時頃)

(喜多流 独吟) 広島明生会

橋弁慶

渡邊 天空(七歳)

(喜多流 独吟) 広島明生会

猩々

藪下 いるは(六歳)

(金剛流 連吟) 平成二十九年金剛流能楽ワークショップ能楽入門講座受講生

泰山府君

江川 恵子
岡田 泰子
沖野 芳枝
川崎 美香
木村 洋子
楠木 清美
倉中 綾子
小林 文
山王 泰治
新宮原 正美
高田 裕志
谷野 一義

儀 修治
堂 貞道也
新見 順子
新見 順子
宮本 京子

(宝生流 連吟) 能楽ワークショップ羽衣会

西王母

森山 直美
柳川 康彦
山元 ヤエ子
野崎 信平
森 憲治
原 明博

(十二時頃)

(喜多流 連吟) 喜雲会

紅葉狩もみじがりがり

藤原 静子
森井 孝子
中本 淳子
結城 喜久子
小畑 映美

武内 俊彦
山本 希生
庄野 貢司
牧野 徳次郎

中田 光
大上 富也
田尾 則彦
齊藤 祥二

(喜多流 仕舞) 広島明生会

国く 栖ず

久保田 恵造 (六歳)

地謡
森脇 崇
久保田 育造
久保田 耕一

(観世流 仕舞)

女おみなめし 郎なめし 花はな
蝉せみ 丸まる 道行みちゆき
松まつ 虫むし クセ

小畑 智子 (広島集杉会)

美除 千鶴 (二葉会)

田室 好子 (広島観風会)

地謡

新見 好枝
津田 和佳
出本 勝範

(喜多流 連吟) 広島明生会

清きよ 経つね

新田 るみ子
野口 みどり
大上 寿美子

萬谷 和子
藤野 倍子
福永 元子

(十三時頃)

特別企画 能楽ガイド★広島

地元広島に所縁の深いプロの能楽師による能楽座談会。
今回のテーマは「舞」です。舞いのシステムや流派の特徴などを
トークや実演を交えながら紐解いてゆきます。
初心者から上級者まで、能楽を楽しく学べる新企画に乞うご期待。

観世流能楽師 津田和佳
宝生流能楽師 石黒実都
金剛流能楽師 豊嶋晃嗣
喜多流能楽師 大島衣恵

(宝生流 連吟)

高野物狂

野崎 信平
原 明博
森 憲治

(喜多流 仕舞) 喜雲会

西王母

田尾 則彦

地謡

武内 俊彦
山本 希生
中田 光
大上 富也
齊藤 祥二
庄野 貢司
牧野 徳次郎

(観世流 独吟) 広島緑鈴会

勸進帳

小笠原 康夫

(十四時頃)

(金剛流 仕舞)

安^あ宅^{たか} 善^う知^と鳥^う 鶉^う之^の段^{だん} 通^{かよ}小^こ町^{まち}

松村 宜親

吉岡 桐子

木村 ゆかり

松村 和子

地謡

松野 豊嶋

晃嗣 恭憲

(喜多流 連吟) 広島邦生会

賀^か茂^も

上田 一臣
末田 秀熙
岡本 忠

(観世流 連吟) 広島上田観正会

小^こ鍛^か冶^じ

山崎 惠美子
宮下 渚
水元 典子
戸田 菊枝
塚脇 宏子

山中 豊美
天方 千津江
能美 千恵
田中 邦枝
寺岡 幸子

(喜多流 連吟) 鈴謡会

鉄^{かな}輪^わ

上原 安祥
冲室 征紀
宮本 満治
佐伯 宣幸

武内 俊彦
山本 希生
田尾 則彦
森本 信幸

(喜多流 仕舞) 広島明生会

高砂

諏訪 義円

地謡

久保田 峻司
泉原 寛康
久保田 耕一
森脇 崇

(金剛流 独吟) 豊雲会

勸進帳

中尾 光宏

(観世流 連吟) 広島観昭会

玉之段

高田 香澄
山口 順子

日野 尚子
三次 友子
杵内 光子
久保木 恵子

谷川 正樹
横山 祐吉
西本 恵司
久都内 正也
鈴木 三達

(宝生流 仕舞)

田村 葛政 野宮

荒井 照江

坂本 由紀子

原 明博

中村 濤子

地謡

森 憲治
石黒 実都
野崎 信平

(十五時頃)

(喜多流 連吟) 広島喜長会

山やま
姥んば

穴山
敏文

倉田 東一郎
山口 豊彦
山下 輝弘
阪野 征二

(金剛流 連吟) 豊雲会

桜さくら
川がわ

濱田 珠希
細村 敬子
木村 ゆかり
宮川 眞理子

吉田 惠
斎木 和美
岩崎 泰子
吉岡 桐子

松村 和子
泰田 恵子
井手口 富美子

(十六時頃)

(宝生流 連吟) 古流会

羽は
衣ころも

重田 千晴
徳原 恵美子

奥条 礼子
大坪 眞理子
坂本 由紀子
荒井 照江

野崎 信平
森 憲治
原 明博

(喜多流 連吟) 広島邦生会

江え
口ぐち

木村 裕代
米田 晴子

(喜多流 仕舞) 広島大島会

俊成忠度しゅんせいただのりクセ

須崎 恵子

地謡

栗栖 陽子
望月 由美
藤井 房江
榎井 衣恵
大島 浩子
北崎 弘子
戸田

(喜多流 連吟) 広島明生会

三輪みわ

石原 聡一郎

渡部 魁
諏訪 義円
泉原 寛康
谷川 修真
森脇 崇
久保田 峻司

横山 文和
久保田 蓋世
稻垣 武
泉原 龍見
久保田 耕一
廣藤 武士

(喜多流 連吟) 広島大島会

敦盛あつもりサン曲止メ

佐伯 邦芳
北崎 慎二
佐藤 均
山下 壽水
山井 寛久
藤井 忠弘
守矢

新本 博行
栗原 幡二
寺田 良二
守矢 雅彦
向井 要介
池庄司 潔

(十七時頃)

(金剛流 連吟) 豊雲会

竹生島ちくぶしま

今井 浩司
藤原 泰治
中本 浩三
中川 雅嗣

阿佐 巖
黒川 信之
日高 雅彦

附 祝 言

(午後五時半頃終了予定)

仕舞あらずし解説

国栖

浄見原天皇は大友皇子に追われ春の夜に吉野へ逃れてきた。一行は川の畔の庵に住む老夫婦に身分と事情を明かし、召上り物を所望する。老人は残った焼鮎（原典は腹赤魚）の生命感から川に返せば奇特により生き返って泳ぐ。神功皇后の新羅平定の軍占いを引いて吉兆を予想した老人は追手が迫ったのを知って一行を川舟に隠して匿う。やがて現れた追手に不審がられるも老人の凄みと迫力で追手は追掃される。夜更けに浄見原天皇を慰るため呂律の調べの音を奏していると、老夫婦は消える。代りに美しい天女が現れて舞い出すと金剛蔵王菩薩が出現して大いに威力を示し天武の聖代を安泰にしたのであった。（五番目又は初番目物）

西王母

楚二十五代穆王の宮殿に里女がやってくる。女は三千年に一度桃の花が開花して実を結ぶのは帝の御威徳によるものであるから一枝献上したいと申し出る。帝がそれは天上の西王母の園に咲く桃ではないかと推し測る。すると女は再度、天上より煌びやかな西王母の姿となって現れ春風に舞い天上へと帰る。脇能（初番目物）

女郎花

石清水八幡宮にて旅の僧が男塚女塚の前で用いていると塚主である小野頼風と妻の亡霊が現れる。都から帰らない夫を慕う女心のはかなさから放生川へ妻が身を投げた。その塚に生えた一本の女郎花が夫の方へ靡く様が不憫を助長し続いて夫も身を投げたのである。二人の亡霊は邪淫戒を破ったため地獄の責め苦に成仏できない由を訴えて僧に回向を乞うのである。（四番目又は二番目物）

蟬丸

道行

延喜第四の皇子蟬丸は生まれつき盲目であることから勅命により逢坂山に捨て置かれた。藁屋に独居して慰みに琵琶を奏して過ごすのであった。蟬丸の姉に生まれつき髪が荆棘状の逆髪という心が澄んだ狂女がいた。いつしか逆髪は徘徊しつつ花の都を出ると賀茂川、末白川を渡り栗田口より街道へ出て山科を経て逢坂の走井に着く。そこで名水を湛えた井戸を覗き水面に映った乱れ髪の我が姿が浅ましく見えるのである。（四番目物）

松虫

クセ

摂津国阿倍野に酒売り商人がいた。そこへどこからともなく若い男達が酒を飲みに寄っては酒宴をなして帰るのであった。今日も来ていた男が「松虫の音にもや友を偲ぶらん」と詠めば

商人は謂れを尋ねてみる。すると男には連れ立って酒を飲み夜遊に興じていた友について吐露しはじめ。ある秋の暮のこと夜遊帰りの道すがら松原の草叢で松虫の音が聞こえる方へ面白がって分け入ったところで帰らぬ人となった。友を失い悲しむ男の亡霊は商人の弔いに感謝しつつ説法明眼論の前世結縁などを引いて友を偲んで舞うが明け方に消えて虫の音ばかり残る。（四番目物）

安宅

兄の源頼朝から追われた義経、弁慶、家臣の一行十二人は、山伏の姿に変装して北陸道から奥州方面へ下る途中安宅の関で、富樫に留められる。弁慶の機転で本物の山伏を思わせる迫真の演技に富樫は一行の通行を許す。先へ進んでいると富樫が追いついて、関で怪しんだお詫びに酒を一献傾けたいと申し出る。快諾した弁慶は盃を交わすうち「鳴るは滝の水、日は照るとも絶えずとうたり」と舞い、富樫が酔った隙に一行は脱出して陸奥の国へと下って行ったのである。(四番目又は二番目物)

善知鳥

諸国一見の僧が立山の修行が終わって下る途中で老人に呼び止められる。陸奥へ下る僧に外の浜で亡くなった獵師の形見の蓑笠を妻子の元へ届けて欲しいと託す。僧は受けて妻子を訪ね蓑笠を手向け、回向する。すると獵師の姿となった老人が現れ娑婆での殺生の営みの報いで善知鳥が化鳥となって襲ってくる地獄の様を現して僧に回向の助けを求めて失せるのであった。(四番目物)

鵜之段 (鵜飼)

旅の僧二人のところへ鵜使の老翁がやって来る。老翁は殺生禁断の場所で漁をした罪で処刑された鵜使の亡者であると告げ回向を乞う。それでは罪障懺悔に漁の様を見せるよう僧が所望する。鵜使は松明を振り立て荒鵜を放し激しく鮎漁の様を見せやがて篝火も消えて名残惜しく闇路にさ迷う。鵜飼 (五番目物)

通小町

夏安居の僧へ毎日本の実や薪を持ってくる女は薄が生いたる市原野辺に住むという。とある人が通りかかると薄一叢の中に小野の小町の墓を見つける。女が小町の亡霊と知った僧は墓の前で回向する。小町は喜び僧に授戒を乞うと現れた深草少将が一旦は拒絶する。僧の勧めで深草少将は百夜通いの様を見せて飲酒の戒めを守ったことで罪が消滅し小町とともに成仏する。(四番目物)

高砂

阿蘇の神主友成が高砂の浦で出会った老夫婦に「相生の松」の謂れを問うと、老人は住吉に住み老女は高砂に住む夫婦であり、古今集の序に「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」とあり、松は千年の緑をたたえた平和と繁栄の象徴であると語り姿を消す。住吉に着いた友成一行の前に住吉明神が現れ、颯爽と舞楽を舞い国家の安泰を寿ぐ。脇能 (初番目物)

田村

クセ

思い立った僧二人が東国より諸国を訪ねながら弥生半ばには都に着く。清水寺に参詣すると時節柄地主権現の桜の花盛りである。春の空、四方の山並みの長閑な景色を愉しんでいると、宮守の童子に出遭う。僧は童子に清水寺の来歴を語るよう所望する。童子は行轍居士のことや坂の上の田村磨が檀那となって大伽藍を建立し千手観音像を据えたことなどを語り名高き花の春の空、音羽の滝の白糸、地主の花、青柳の緑、花桜の装いと叙景を続けて我が行く方を見よと田村堂の中へと入っていく。後修羅 (二番目物)

玉葛（玉鬘とも）

都を出て和州南都の寺社を参拝した僧が初瀬詣の道すがら初瀬川の辺で遭った里女と紅葉の景色を眺めて御堂に参詣する。里女は二本杉で「二本の杉の立所を尋ねずは古川野辺に君を見ましや」の古歌は右近が詠んだ歌で自らは玉葛の亡霊であるとあかして僧に回向を乞う。玉葛は妄執の雲霧の中で苦しむ様を見せるが数々の罪を懺悔して成仏するのであった。（四番目又は三番目物）

経政（経正とも）

仁和寺に幼少より仕えた経正が一ノ谷で討死したのを隣れみ僧都行慶は琵琶を含む楽器を奏す追善法要を執り行う。そこへ琵琶の音に誘われるように経正の亡霊が現れて生前に所有した琵琶青山を弾いて昔を懐かしむ。やがて合戦で我が身に矢が雨のように降りかかり剣は身を切り猛火は身を焼く修羅道苦患の様を見せ、嵐に火が吹き消されると暗闇になって失せていく。（二番目物）

野宮

諸国一見の僧が秋の末に嵯峨野の野宮を訪れ、一人の美しい女と出会う。女は昔六条の御息所が此処に住まれて、光源氏が訪ねられたのが今日九月七日であったことなどを語り、自分が御息所であると告げて鳥居の柱の陰から消える。僧が跡を吊っていると車の音が近づいて、御息所の霊が昔の姿で車に乗って現れ、在りし日賀茂の祭りに葵上と車争いで追い払われ、辱められたことを語り、その妄執を晴らしてほしいと頼んで舞を舞い、唯夢の世となった昔の恋を懐かしみ再び車に乗り、去って行く。（三番目物）

俊成忠度

クセ

岡部六弥太忠澄は一ノ谷の合戦で討取った薩摩守忠度の矢入具（原典は籠に縫い付け）の中から時世詠歌の短冊を見つけた。忠澄はその短冊を届けるために藤原俊成邸を訪ねる。そのとき忠度の亡霊が現れて修羅苦言の有様を見せるが「さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」の歌に梵天が気に入り責め苦を解かれ夜更けから白々と明けると亡霊は消えていく。（二番目物）

能楽のバリエーション

初番目物（神）脇能。

神体を主人公として天下泰平・五穀豊穡を願う目出度い内容のもの。

二番目物（男）修羅物。

修羅道に堕ちた亡霊たちによる苦患と敗北者の滅びの美学を叙情的に表現。

三番目物（女）鬘物。

王朝の優美な女性たちや、草木の精・天人などが織り成す幽玄の世界を優美に表す。

四番目物（狂）雑能・狂女物。

悲しみ、怒り、恨み、嘆き等、人間の持つ情念を様々に描く。

五番目物（鬼）切能。

鬼・天狗・神・妖精などがダイナミックに活躍する豪華絢爛な雰囲気的舞台。

用語解説

・クセ

曲の中心となる重要な部分。

・仕舞

能の一部分を、シテ（主役）一人が面・装束をつけず紋付袴で、囃子を伴わず、地謡だけで演ずること。

・附祝言

一日の能の最後に地謡がめでたい一節を謡うこと。

・独吟

能一曲中の特定の部分を、囃子を伴わず一人で謡うこと。

・道行

登場人物が旅をする場面。蟬丸など重要な舞い所となる曲もある。

・連吟

曲の一部分を、二人以上で声を揃えて謡うこと。

能楽を習いたい方は

広島市内では現在四流派が活動しています。
お気軽にお問い合わせください。

【広島観世会】

代表 竹内 善幸

〒733-0871 広島市西区高須一―二―四七

TEL 二七四―〇一九四

【広島喜多会】

代表 齊藤 祥二

〒730-0866 広島市中区南吉島一―二―一七

TEL 二四三―一七四六

【広島金剛会】

代表 中尾 光宏

〒730-0833 広島市中区吉島西一―二―八一

TEL 二四一―六一五三

【広島宝生会】

代表 野崎 信平

〒736-0855 広島市安芸区矢野西三―三―五―一八

TEL 八八八―二六三三